

森さんと高橋君は特別活動の一環で芸術鑑賞として美術館を訪れた。そこでは特別展示として「ヴィーナス展」が開催されており、いくつかのヴィーナス像が展示されていた。その中でミロのヴィーナス像(資料①)、カピトリノのヴィーナス像(資料②)を鑑賞した。それぞれの像には注釈が付けられており、それを読んでの二人の会話が以下に記されている。なお、二人は以前に「現代の国語」の授業で、高階秀爾著『ミロのヴィーナスはなぜ傑作か?』(文章1)を学んでいる。

文章1

《ミロのヴィーナス》は、頭部、上半身、腰、両脚がそれぞれ別々の部分として明確に区別され、にもかかわらず全体としては統一が保たれています。この「部分と全体の調和」こそが、古代ギリシャ人が考えた「美」の第一の条件なのです。

そして、その「調和」を生み出しているのが、身体各部分の間に設けられた「比例関係」です。今日でも「八頭身美人」というような表現が用いられますが、まさにこの身体の各部分を比例関係によって結びつけたのが古代ギリシャ人だったのです。人体の各部分を統合するこの比例関係は※「カノン(規範)」と呼ばれます。紀元前5世紀頃に古代ギリシャの彫刻家ポリュクレイトスによって、「1対7」すなわち七頭身のカノンが生み出されました。これが紀元前4世紀頃には「1対8」すなわち八頭身のカノンへと洗練され、それが今日でも「美しい身体」を表す基準となっています。

古代メソポタミアおよびエジプトの彫刻と《ミロのヴィーナス》を比較した際に気がつくもうひとつの大きな違いは、前者には「動き」がまったく感じられないのに対して、後者が生き生きとした動きをともなっている点です。

もちろん、古代エジプトにも《官吏立像》や※《供物を運ぶ女性》のような、片脚を前に出して歩いている姿の彫刻が少なからずあります。しかし、それらの彫刻においても、正中線が垂直であることは変わりません。その結果、動きの一瞬をとらえて固定したもの、いわば「静止した動き」の表現となっていて、動勢はまったく感じられないのです。

それに対して《ミロのヴィーナス》では、身体の重心が右脚によって支えられているために、左脚は自由に動かすことができます。そのため左脚を大きく前に踏み出すことができ、それが身体のねじれと呼応して、生き生きとした動勢を生み出しているのです。この「動き」の導入が、古代ギリシャ人が考えた「美」の第二の条件です。

S字型にひねった身体と重心を支える「支脚」、自由に動かせる「遊脚」によって生み出された、安定しながら動勢を感じさせるこのポーズは「コントラポスト」と呼ばれ、この後、ヨーロッパの彫刻および絵画における人体表現の基本となって今日まで受け継がれていきます。(中略)

古代ギリシャ人は「人間中心主義」により、人体を「美の基準」と考えましたが、その人体には、古代メソポタミアおよびエジプトの場合とは異なり、具体的なモデルは存在しません。あくまでも「比例関係」によって生み出された「理想的」な人体です。このことは、顔貌表現に顕著に現れています。古代ギリシャ彫刻の、とりわけ女性像において、その顔貌が没個性的で類型的なのはこのためです。理想的な形態につくられているがゆえに、その表情は、一見、写実的なようでありながら、古代エジプト彫刻に見られたような肖似性はありません。

それに対して、古代ギリシャ彫刻の女性像に見られる衣装の表現は実に写実的です。一般的なイメージとは異なり、古代ギリシャにおいて裸体表現がつけられたのは、もっぱら男性像でした。女性の裸体像が初めてつけられたのは紀元前4世紀頃のことです。それまで女性像はすべて着衣像でした。そのため、女性の身体を表現するために用いられたのが、水に濡れたり風に吹かれたりして身体に張り付いた衣装が生み出す線の美しさでした。《ヴィーナスの誕生》などに見られるような、身体にぴったりと張り付いた衣装の線によって身体のふくらみを表す彫刻が数多くつくられました。

それらのなかでもっとも優れた作品が、※《サモトラケのニケ》です。《サモトラケのニケ》では、勝利の女神の身体が、そのゆるやかなコントラポストと相まって、風に吹かれる衣装の線の美しさによって見事に表現されています。

この「衣装表現」が、古代ギリシャ人が考えた「美」の第三の条件です。彼らは、理想化された形態と写実的な衣装の表現によって、「写実的な理想主義」とでも呼ぶべきものを実現しようとしたのです。そのため、古代ギリシャ彫刻は、理想化されていながらも決して観念的ではない、リアルな身体表現を実現することができたのです。

改めて《ミロのヴィーナス》を見てみると、上半身では裸体の美しさを、下半身では衣装の美しさを表すことによって、「写実的な理想主義」が見事に実現されていることがわかります。

それでは、なぜ《ミロのヴィーナス》は「傑作」なのでしょう。それは、この彫刻がこれまで述べてきたような「美」の三つの条件を満たしているからでしょうか。

確かにそれはそうですが、より正確に言うとその答はむしろ逆で、《ミロのヴィーナス》に代表されるような作品こそがヨーロッパ美術における造形表現の基本となっているから、ということではないでしょうか。つまり、このような彫刻こそが「美」の三条件を具現するものとして、その後のヨーロッパ美術を生み出す源泉となってきたということです。それは、ヨーロッパの美術において、ひとつの作品が美しいかどうか、傑作であるかどうかは、《ミロのヴィーナス》のような彫刻を基準としてはかられるということです。その意味で《ミロのヴィーナス》は、それ自身が「傑作」であるというだけでなく、ヨーロッパ美術の歴史における数多くの傑作たちの源となっている一群の作品の、いわば「代名詞」なのです。

(高階秀爾著『ミロのヴィーナスはなぜ傑作か?』)



資料② 二人が美術館で鑑賞したカピトリノのヴィーナス像と注釈

カピトリノのヴィーナス

クレメンツ 10 世の在位中（1670 年-1676 年）にヴィミナーレの丘で、サン・ヴィターレの近くのスタッツィ家の庭園で発見。「恥じらいのヴィーナス」の諸型のひとつ。この型は、「クニドスのアプロディーテー」に由来している。「カピトリノのヴィーナス」とその諸型は、両腕のポジションで見分けられ、「恥じらいのヴィーナス」は、右手で両乳房を、左手で鼠径を覆っている。

実物はカピトリノ美術館所有。

現代に五体完全な形で現存する珍しい好例として名高い。



資料① 二人が美術館で鑑賞したミロのヴィーナス像と注釈

ミロのヴィーナス

ギリシャ神話における女神アプロディーテーの像と考えられている。高さは 203cm。材質は大理石。1820 年にエーゲ海のメロス島(フランス語の発音ではミロ島)で発見。実物はルーブル美術館所有。

この彫像についての評価は大きく分かれるが、美術史学の観点においては以下のように述べられている。

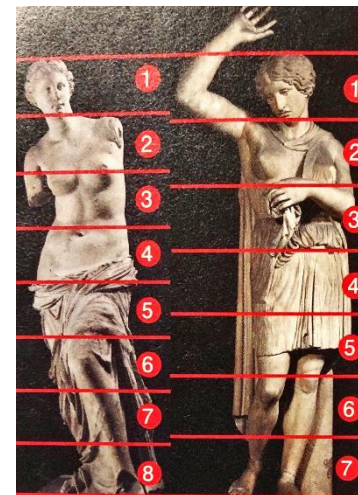
（ミロのヴィーナスは）美術史学の観点からは、決して傑作とはいえない。

なぜ、ミロのヴィーナスが至宝として扱われるのか。美術史の立場からいえば、頭部が残っているからです。頭部が残った唯一のオリジナルとして、稀少価値から評価されているのです。

（中村るい著『ギリシャ美術史入門』）



※《供物を運ぶ女性》



※カノン：右図は比例関係「カノン」が確立した紀元前5世紀頃の七頭身像。その後、左図のような洗練された八頭身カノンが登場する。



※《サモトラケのニケ》

森さん 「これがこの前の現代の国語の授業で習ったミロのヴィーナス像だつて。」

高橋君 「意外と大きいね。」

森さん 「そうね。確か、授業ではミロのヴィーナス像は **A** という理由で傑作であると言えると習ったわ。」

高橋君 「そうだったね。じゃあカピトリノのヴィーナス像は？やっぱ傑作なのかな？」

森さん 「どうだろう、よく見ると国語で習ったカノンの観点から見たら傑作じゃないのかも。」

高橋君 「そうだった。なんで？」

森さん 「**B** からよ。」

高橋君 「なるほどねえ。」

森さん 「あ、でも見て。注釈にはミロのヴィーナス像は傑作であるとは書かれていないわ。」

高橋君 「本当だ。希少価値が高いから評価されているとだけ書いてあるね。」

森さん 「授業で習った文章とは観点が違うようだけど、注釈に書いてあるように、芸術品に対しての評価って人によって変わるのね。」

高橋君 「そうだね。じゃあ僕たちの芸術品に対する評価って違うのかな。この二つのヴィーナス像を比べてみるとどう思う？」

僕はミロのヴィーナス像の方が美しいと思うなあ。」

森さん 「あら、どうして？」

高橋君 「僕、将来は建築デザイナーになりたいくて、原研哉さんの本を読んだんだけど、それを読んだら、

五体満足のカピトリノのヴィーナス像より両腕が無いミロのヴィーナス像の方が美しいのかもしれないって思ったんだ。

日本人だからそう思うのかもしれないけど。」

森さん 「じゃあ五体完全な状態のカピトリノのヴィーナス像は美しくないってこと？」

高橋君 「もちろんカピトリノのヴィーナス像も美しいと思うし、見ていて迫力もあるけど、美という観点から見たときにミロのヴィーナス像の方が美しいと感じるなあ。」

森さん 「そうなんだ。その本今度貸してくれない？私も読んでみたいわ。」

問一 森さん・高橋君の会話中の空欄 **A** に当てはまる文章を九十字以上百字以内、空欄 **B** に当てはまる文章を三十字以上三十五字

以内でそれぞれ書きなさい。(空欄 **B** は 文章「における※カノンの注釈図を参照すること。)

問二 芸術鑑賞を終えて、二人は後日「ヴィーナス展」のレポートを書き、提出することとなった。その際に高橋君はミロのヴィーナス像について書くことにした。以下に高橋君のレポートの一部が記してある。次の(1)～(4)の条件を満たすように感想文中の空欄を埋めなさい。

(1) 会話文中の傍線部「原研哉さんの本」の抜粋文章が文章□として記してある。文章□を参考にすること。

(2) 二つの文に分けて九十字以上百字以内で書くこと。(句読点を含む。)

(3) 一文目は高橋君のミロのヴィーナス像に対する評価を書くこと。

(4) 二文目は「なぜなら」で書き始めること。

感想文

「ヴィーナス展」に行つて、初めてミロのヴィーナス像を見ました。授業で習っていたのでどういふものかは知っていました。実物は想像していたより大きくて迫力がありました。ミロのヴィーナス像の注釈には希少価値が評価されているとありました。しかし、

空欄

と思うからです。今まで美術館に行くことはあまりありませんでしたが、これからはもっと芸術に触れて感性を磨いていきたいと思います。

文章□

日本美術の中で、最も人気のある作品のひとつに、長谷川等伯の「松林図」がある。これは六曲一雙すなわち六枚つながりの画面が左右一対に配された屏風である。勢いのある筆触で松林が描かれているが、この作品の中には様々な白や空白が運用されている。

解答例と指導事項

問一 空欄 A

部分と全体の調和がとれている点、身体のねじれによる生き生きとした動きが導入されている点、布を用いた身体描写を取り入れた表現がなされている点の美の三条件を満たし、ヨーロッパ美術の源泉とされているから

指導事項

C 読むこと

ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握すること。

問一 空欄 B

八頭身像じゃなくて、比例関係による部分と全体の調和がとれていない

指導事項

C 読むこと

イ 目的に応じて、文章や図表等に含まれている情報を相互に関連付けながら、内容や書き手の意図を解釈したり、文章の構成や論理の展開などについて評価したりすることととも、自分の考えを深めること。

問二

僕はミロのヴィーナスは美しいと感じました。なぜならミロのヴィーナスは両腕が欠けているからこそ、その空白に対して様々な想像をすることができると可能性を持っており、日本人が育ててきた美意識に合った作品だ

指導事項

B 書くこと

ア 目的や意図に応じて、実社会の中から適切な題材を決め、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にすること。